

学校教育目標の協働的な実現

－児童の実態分析を核としたチーム学習の展開－

石井 恵子(21004)

1. はじめに

持続可能な社会の創り手となる資質・能力の育成や社会に開かれた教育課程の実現が求められ、学校の組織力向上は必須となっている。

しかし、学校は多忙化や同僚性の希薄化、年齢構成のアンバランス等、様々な課題が生じており、今こそ、教職員相互のより有機的な協働が強く求められる。

そこで、児童の実態分析を核としたチーム学習を展開したいと考えた。チーム学習とは、「教職員一人一人が児童の実態分析を行い、手立てを考えて授業実践し、課題を次に生かして、児童の成長をチームで共有し、学び合うこと」と定義する。また、児童の実態分析とは、「目の前の具体的な児童の姿を様々な角度(言葉や表情、動作、学級の仲間や教師との関係、習熟度テスト・仙台市標準学力検査・生活学習状況調査・学校生活アンケート・学校評価アンケート等の結果、前年度からの引継ぎ資料等)から見取り、評価すること」と捉えた。

この実態分析を核としたチーム学習を教育活動全体で展開し、学校教育目標の協働的な実現を目指す。

2. 研究の目的

学校課題を解決し、児童の資質・能力を育成するには、教職員相互のより有機的な協働が大切である。そこで、児童の実態分析を核としたチーム学習を展開し、学校教育目標を協働的に実現する手立てを明らかにする。

3. 研究方法

- (1) 協働的な教職員集団に関する理論研究と調査
 - (2) 所属校でのこれまでのチーム学習の事例分析
 - (3) 実習校でのチーム学習としての実態分析と共有
 - (4) 所属校での児童の成長を目指したカリキュラム・マネジメント
- ① 学校、地域・家庭の協働を可能にする文化的資源「わかあゆ体操」の再調査と利活用
 - ② 3学年教員とのチーム学習(「わかあゆ体操」を探究課題とした総合的な学習の時間の展開)

- ③ 異学年教員とのチーム学習(「わかあゆ体操」教師用資料の作成)
- ④ カリマネ推進メンバーとのチーム学習

4. 研究成果

(1) 協働的な教職員集団に関する理論研究と調査

文献研究の結果、「協働的な教職員集団」を「チーム学習を通して目的に向け効果的に行動するための意識と能力を継続的に高め、伸ばし続ける組織」と捉えた¹⁾。その上で、校長(9名)から聞き取り調査を行ったところ、教職員の学校経営への参画意識を高める様々な働き掛け(教育ビジョン研修会、プロジェクトチームによる学校課題への取組等)や学校内外における情報発信が行われており、それらは教職員一人一人の自己有用感を高めていた。

調査した学校では、校長が学校経営方針を教職員や保護者、地域、児童に明確に示し、教務主任や学年主任、研究主任等は、より具体的な児童の姿で意識できるように学年経営や校内研究、研修等を展開していた。更に、幼保小の接続を意識し、幼児期の遊びや経験を生かした生活科の環境づくりや、考える力の育成を大切にされた総合的な学習の時間の探究活動が行われ、各教科の見方・考え方と有機的に結び付いて児童の資質・能力を育てていた。

(2) 所属校でのこれまでのチーム学習の事例分析

過去の実践を検証、分析したところ、協働を促す要因として、ビジョン(学校教育目標)を達成するという共通意識や意識への働き掛けを促すメンタルモデル(憧れ・価値観)が存在していた²⁾。また、チーム学習は、児童の実態分析や教職員のスキルの習得、同僚性に影響を与え、教職員の自己有用感を高めることが分かり、このことが一人一人の創造性の源につながると推察した。

(3) 実習校でのチーム学習としての実態分析と共有

実習校で外国語活動におけるチーム学習の機会を得て効果を検証した。その結果、学校教育目標を意識

した学年経営や、意識への働きを促すメンタルモデルという土台の上で、対話を通して丁寧にフィードバックしながら児童一人一人と向き合い、チームで児童の成長を共有すると、教職員の自己有用感が高まり、一人一人の創造性につながる事が検証できた。

著者は、チーム学習としての児童の実態分析と共有を担任や児童と共に授業中に試みた。授業の始めに、担任や児童と本時のめあてを確認し、授業中、達成されつつある外国語活動の目標にあるコミュニケーションの素地につながる児童の姿を担任と著者で見取り、写真やビデオに撮影し、テレビに映して学級全体で振り返った。児童の姿を児童と共に共有したことで、学級内にメンタルモデルが生まれ、児童一人一人の自己有用感が高まっていった。

(4) 所属校での児童の成長を目指したカリキュラム・マネジメント

① 学校、地域・家庭の協働を可能にする文化的資源

「わかあゆ体操」の再調査と利活用

マネジメントの視点に立ち、学校の強みの活用を考えたとき、昭和55年から続く学校独自の体操「わかあゆ体操」について、目的や導入の経緯が不鮮明であることに気付いた。この体操は、目指す姿が明確で分かりやすく、児童同士がメンタルモデルとなりやすい。また、低・中・高学年と発達段階に応じた体操のため、達成感を味わいやすく、上学年の姿は下学年のメンタルモデルとなっている。更に、保護者や地域の人は運動会での「わかあゆ体操」の披露を楽しみにしており、かつては6年生が技を決めると大きな拍手が沸いたり、卒業生も一緒に運動会で「わかあゆ体操」に参加し、その姿は児童の憧れになったりしていた。

元校長や元 PTA 会長、学校支援地域本部スーパーバイザー、保護者、卒業生と対話を重ね、「わかあゆ体操」は、多くの人々の思いや願いと共に継承されてきたことを再確認した。

これらのことから、「わかあゆ体操」は、学校、地域・家庭の協働を可能にする貴重な文化的資源であることが分かった。

しかし、体操の目的や経緯、効果を知る機会が減っていた。そこで、著者は校長や体育主任等の意見を聞きながら、校内で「わかあゆ体操」を見つめ直す機会を設け、各学年主任へ働き掛けた。すると、「わかあゆ体

操」を活用して、児童の成長を支援したいという学年が出てきた。

② 3学年教員とのチーム学習（「わかあゆ体操」を探究課題とした総合的な学習の時間の展開）

3年生の学年主任から、「わかあゆ体操」を探究課題として総合的な学習の時間を展開したいと相談を受け、チーム学習を展開することになった。

まず、学校教育目標の実現を意識するために、担任たちと学年目標を共有した。年度始めの「目指す児童の姿を考える会（全教職員参加）」で、3学年は「進んで考える」「友だちと助け合う」「まずはやってみる」という学年目標を立てていた。特に「友だちと助け合う」ことが、コロナ禍で入学してきたこの学年の児童の課題であると担任たちは感じていた。そこで、幼児期での人との関わりが薄いという実態から、一人一人の児童を丁寧に見取り、人やモノ、コトとの関わりを通した学びを展開することにした。

そして、学年会では常に、目の前の児童が何をしたいのか、何に興味を持っているのかを話題に対話を重ねた。児童たちは、探究活動として「わかあゆ体操」の目的や歴史、効果を探ることになった。

チーム学習としての児童の実態分析と共有は、実習校での学びを生かしつつ、コロナ禍で学年全体での集会活動に制限があるため、Google Meet と対面の両方を活用して行った。

著者は、事前に担任と本時のねらいを確認し、授業の始めは学年で Google Meet に入って、画面越しから児童に声を掛け、各学級の児童一人一人の表情や動き、学級の仲間や教師との関係等、言葉にならない雰囲気も含めて共有し合った。そして、話合いの時間を設け、児童が自分たちで考えて自分たちの力で進めることができるように支援した。話合い中、各学級に顔を出し、担任と共に成長しつつある児童一人一人の姿を見取り、前向きな声掛けを行った。その後、各学級からの意見を全体で共有し、互いのアイディアを賞賛し合い、児童の間に意識への働きを促す新しい価値観としてのメンタルモデルが形成されるように働き掛けた。また、ICT に苦手意識を持っている担任の学級から Google Meet に入り、全ての担任が安心して児童の実態分析と共有が行えるように配慮した。

探究が進むと児童は次第に自ら考えるようになり、「自分たちで考えたり話し合ったりすることが楽しい」と校長室や職員室に足を運んで調べるようになった。そして、「わかあゆ体操」の創設を知る元校長へのインタビューや、学校支援地域本部の方との対話、卒業生へのインタビューと共演、就学時健康診断での園児への紹介ビデオ作成と上映に至った。

このような児童の姿を写真に撮り、学年掲示板に学びの履歴として掲示し、実態分析と共有の可視化を図った。そして、校長や学校支援地域本部の方、保護者、卒業生、他の教員たちは、児童の主体的に探究する姿について語り、それを耳にした児童や担任は自分たちの取組に自信と手応えを感じるようになった。

7月、12月に、学校教育目標の実現のために実施した「児童の姿を振り返る会(全教職員参加)」で、担任たちは、「児童が自分から学ぼうとするようになった」「協力し合うようになった」と述べた。

児童の「進んで助ける」ことに関する意識調査(4月実施の「仙台市生活・学習状況調査」と、12月実施の「生活振り返りアンケート(学年作成)」)の結果(図1)を比較・分析してみると、「進んで助ける」ことを実感する児童の増えが顕著であった。一方、この結果を受けて、変化が見られなかった児童や否定的な回答をした児童への手立てについて、改めて考えていくことになった。

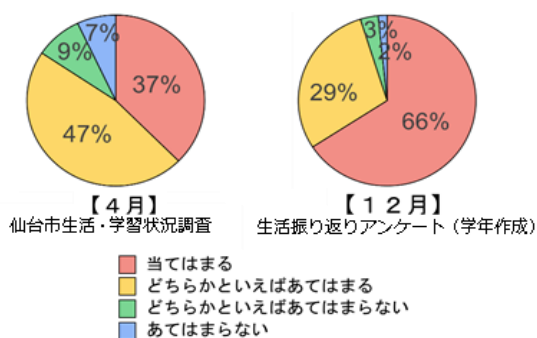


図1 児童の「進んで助ける」ことに関する4月と12月の意識調査の結果

また、総合的な学習の時間の振り返りカードの自由記述をAIテキストマイニングツール User Local のワードクラウド³⁾で分析し、6月と12月で比較したところ、6月は「楽しい」「調べる」「おどる」「ふしぎ」が、12月は「楽しい」「調べる」「考える」「耳をかたむける」「友だち」「協力」が主なキーワードとして出てきた。このことから、調べたことについて考えるようになったことや、友だちの意見に耳

を傾けたり協力したりするようになったことが推察できる。

自由記述には、「分からないことがあったらまずは自分で考えてみるようになった」「自分で調べたら考えるのが楽しくなった」「考える力が付いてきて学ぶのが楽しくなった」という記述が見られ、「自分で考えよう」と意識が変わっていったことがうかがえた。また、4月の意識調査で否定的な回答をしていた児童が、12月には「友だちと協力するようになった」「いろいろな人と協力できるようになった」と肯定的な回答をするようになった。「友だちが増えた」と述べる児童もおり、人との関わりが広がったこともうかがえた。

児童の交流の広がりや深まりを見て、担任たちは、幼児期に人との関わりに心配が見られた児童が、確実に成長していることを実感することになった。

③ 異学年教員とのチーム学習(「わかあゆ体操」教師用指導資料の作成)

異学年教員とのチーム学習では、メンバーを募って「わかあゆ体操」の歴史的価値や教材としての可能性を探り、教師用指導資料を作成した。

活動を通して、若手教員は、「体操の目指す姿や意味を考えることで指導の質が変わる」と述べ、目的意識を持って指導しようと意識が高まったことがうかがえた。また、総合的な学習の時間の主任や体育主任は、「3年生の総合的な学習の時間の展開について知り、主体的な児童を育てるための探究の在り方について考えるきっかけとなった」、「体操の指導方法を伝えたり育成したい力を共有したりすることの大切さに気付いた」と述べ、それぞれの立場での自分事になったことが分かった。教職員からは、「既存の教材に対して改めて価値付けすることは変わりゆく時代に即している。どの学校にもそのような伝統的な教材はあると思う。この研究はそれぞれの学校での教材を見直す上で方向を示すものになったのではないか」との評が得られた。

以上のことから、文化的資源の活用は、異学年教員間にとっても自分事となり、協働を生む手立ての一つになるのではないかと考える。

④ カリマネ推進メンバーとのチーム学習

所属校では、校長が「カリマネ推進」という校務分掌を設定している。カリマネ推進メンバー(主に教務主任、副教務を中心とし、必要に応じて生活科・総合的な学習

の時間主任や特別活動主任, 研究主任等が入る)は, 学校経営方針を受け, 教職員一人一人が, 児童の成長を振り返りやすいように, 年度始め・中間・年度末と定期的に児童の実態分析と共有の場を設定している。

教職員から聞き取り調査を行ったところ, 年度始めは学校教育目標を共有する場と聴き合う関係づくり, 中間の時期には児童の主体的な姿を振り返り, 児童の成長を共有する機会になっていたことが分かった。また, 教職員の実態に応じたグループ編成や時期を工夫することも一人一人の自分事となることも明らかになった。これらの感想をカリマネ推進メンバーと共有することで, 児童の実態分析の一助とした。

著者は, 休み時間や放課後を活用して, カリマネ推進メンバーとコミュニケーションを図り, 児童の実態分析を行ってきた。年度末には, 校長, 教頭, カリマネ推進メンバーと共に, 学校教育目標を児童の資質・能力で3観点に整理する機会を得た。年度始めは, 「目指す児童の姿を考える会」を企画する機会を得た。これらの会を通して, 少人数での対話は, 一人一人の思いや考えの共有の場となり, 自分事となることが分かった。

このことから, チーム内での定期的な対話と日常的な対話の両方を大切にすることが意識への働き掛けにつながるということが分かった。

5. 考察

学校教育目標の実現に向けた協働を推進する上で軸となるのがチーム学習であることが明らかになった。

これまでの成果を基に, 協働の手立てを整理したのが図2である

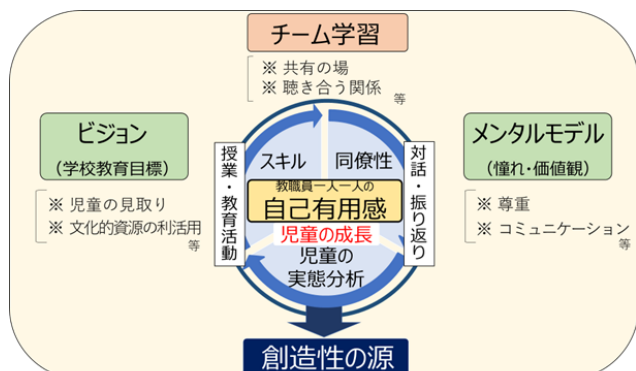


図2 学校教育目標の協働的な実現の手立て

特に, チーム内で対話を通して児童の姿を定期的に振り返り, 成長を共有することが重要だ。そのためには, 普段から互いを尊重し合い, 前向きなコミュニケーション

を図ることが欠かせない。

また, 学校教育目標を達成するという意識や, 意識への働きを促す憧れや新たな価値観としてのメンタルモデルをチーム内で共有すると, チーム学習が促進され, 好循環となることも分かった。

その際, 児童の成長している姿や, これから成長しつつある姿を的確に捉えていくことが必須となる。教職員が児童を見取る力を高めていくためには, 目指す姿を明確にすること, 多様な視点から見る必要がある。

特に, 教職員一人一人が, 日常的に児童の言葉だけでなく, 児童の表情や動作, しぐさ, 学級の仲間や教師との関係といった目に見えない空気(雰囲気)をも感じ取る感性を磨くことが求められる。一人一人が意識すると共に, これらの見取りを普段から学年会で共有したり, 校内研究の中で意識的に取り入れたりすることも効果的な協働のための学び合いとなる。

本研究において, 長年継続してきた文化的資源の潜在的な価値を見出すように意識することや, その価値を共有しつつ, 児童の間にメンタルモデルが形成されるように働き掛けていくことは, 汎用性があると考えられる。

更に, 教職員一人一人が児童の成長を児童と共に共有することは, 教職員と児童, 双方の自己有用感を高めることにつながることも明らかになった。教職員と児童が学校という同じ空間の中で, 互いの自己有用感を高め合うことができれば, 学校が児童にとっては安心・安全な学び合いの場, 教師にとっては働きがいのある場, 地域の人や保護者にとっては, 地域の誇りの場となっていくであろう。

以上のことから, 今こそ, 学校にある文化的資源を見つめ直し, 教職員相互のより有機的な協働を通して, 児童一人一人, 教職員一人一人がメンタルモデルとなって成長を共有し合い, 自己有用感を高めていくことが求められている。

引用・参考文献

- 1) ピーター・M・センゲ著:学習する組織, 英知出版, (2011年)
- 2) ピーター・M・センゲ著:学習する学校, 英知出版, (2014年)
- 3) <https://testmining.userlocal.jp> (2023年1月25日現在)

学校教育目標の協働的な実現 —児童の実態分析を核としたチーム学習の展開—

石井 恵子(21004)

要旨

学校課題を解決し、児童の資質・能力を育成するためには、教職員相互のより有機的な協働が必須だ。そこで、協働の手立てを探った。その結果、軸となるのは、教職員一人一人が対話を通して児童の成長をチームで共有し、互いの自己有用感を高め合うチーム学習であった。その際、児童の成長している姿や、これから成長しつつある姿を的確に捉え、感性を磨くことが求められる。また、学校にある文化的資源を見つめ直し、その価値を共有しつつ、児童の間にメンタルモデルが形成されるように働き掛けていくことが、児童の成長へとつながることも明らかになった。

キーワード: 協働, チーム学習, 児童の成長, 自己有用感, 文化的資源

ユニット指導教員(◎ユニット長)

◎佐々木孝徳, 梨本雄太郎, 本図愛実